
1日だけのRPG

ミズミズ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

1日だけのRPG

【Nコード】

N2213X

【作者名】

ミズミズ

【あらすじ】

朝、起きたら大樹は大自然の中。

混乱していたら目の前がフラッシュして元の世界に戻りました。ところが、学校へいったらクラスみんなが朝、同じ体験をしたこと。

どういうこと？と置いていたら教室に先生が入ってきて全員に携帯を渡した。

先生に言われるがまま電源をいれたら朝と同じ大自然のなかに！
今度は周りに知らない3人がいた。

始まり

「今日も、よく寝たなあ・・・ん？」

大樹は、いつものように起きた。でも、自分は光を浴びていた。蛍光灯とかじゃなくて・・・太陽の光を。

大樹は、大自然の中にいた。

「・・・は？」

周りは森、すぐ傍にはきれいな川、そんなようなところに自分が寝ていて一体何をしろというのだ。

わけがわからず、ぼーっとしていたら突然目の前がフラッシュした。

「うわっっ!!」

気付いたら大樹は、いつもの自分の部屋でベッドの上でそして

蛍光灯の光を浴びていた。

「何だっただんだ・・・？」

今日は、9月の7日。明日は運動会だった。

全員一致の出来事

「何だっただたんだろ・・・」

俺は不思議に思いながら、学校へ向かった。

頭の中はあの風景だけだ。それだけだったから後ろに危険が迫ってくるなんて気付きもしなかった。

気付いた時は、遅かった

「ライダーキーーク!!」

「ふー!」

見事に後ろからライダーキックを一（ランドセルのド真ん中に）かまされた俺はそのまま前に倒れた。

「いつてえ・・・」

「なんだよおー、いつもならよけんじゃんお前。」

こいつは生山廉。俺の昔っからの幼馴染だ。みてわかるようにライダーキックは得意中の得意だ。

「こつちだっているいろいろあるんだよ！考えごとしてたんだからしよ
うがねえだろ。」

「ふーん・・・田賀ちゃんが考え事ねえ。な、それってよっぼどの
事だよな！教えてろ!」

「（妙に鋭いよコイツー！）」

廉は、信じてくれるだろうか。自分に起きた出来事を。「夢じゃない？」とか言つて笑いとばさないだろうか。そもそも、廉に話しているのか？この無神経な男に。

よし、決めた。この際笑い飛ばしてもらおうか。そっちの方が俺も気がすむ。

「・・・信じるか？俺の身に起きたこと。」

最初はこんな感じで。廉は「信じるからさー！」とか軽いかと思った。でも、俺は何かを隠せなかったようだった。

「そんなに・・・なのか？」

「え、まあ、非現実的なことだけど。」

「無理だったら別にいいよ。そんな人のこと聞きだすほど俺無神経じゃないし。」

「こつうところは無神経じゃないんだな・・・」

「今、なんつった。ま、俺も十分考えごとしながらライダーキックしたんだよ。いつもより弱かったら？俺のライダーキック。」

「変わらないよ?!」

「まじでっか。・・・それよりさ、俺の話し聞いてくれるか？」

「・・・うん。」

「今日さ・・・朝、起きたら暗い部屋の中いたんだよ。すっげー混乱してたら突然フラッシュしてさ、気が付いたら自分の部屋にいた。・・・信じねえよな、おまえの無神経・・・」

「無神経って言おうとしただろ。」

その話、俺は信じる。」

廉はふっとこっちをむくと、抱きついてきた。

「!!!!」

「さすが俺の友達！信じてくれた！」

「離せこの無神経！・・・ハアハア・・・あんな、俺が信じるって言ったのはだな、俺も・・・同じ事があったからだよ、今朝。俺は森の中だった。」

「！・・・すげえ、俺達って何か縁でもあるのかな。」

「さあ」

気付いたら学校についていた。教室へ行くと、いつもと様子が違った。

「あ、来た。無神経二人組が。」

「ああ、そうなるのか。」

「なんだよ、それ！っていうかみんなどうしたんだよ静かになつて」

内容を聞いて、俺達はびっくりしすぎた。しすぎて廉は3回転していた。

内容は全員が、俺と廉のように自分の寝ているところではないところにおいて、少ししたらフラッシュして元に戻っていた・・・というものだった。

なんか珍しくこのクラスがしんみりしていると先生が入ってきた。

「はい、おはよう。席につけー。」

「おはようございませーす。」

先生は突然携帯を配りはじめた。スマーとフォンを。

「（なぜに、最新型！？）」

「全員持ったかあ？・・・持ったな。よし、電源つける。その上にあるボタンだ。」

言われるがままみんな押した。まさかこれで異世界に行くなんて考えもしないからな。

「ポチツとな！」

目の前は真っ白になりすぐ真っ暗になった。直前に聞こえたのは先生の

「頑張ってこいよ」

という声だけだった。

全員一致の出来事（後書き）

感想、お願いします！

間違えないでください。女です。

「う……うーん……」

俺が起きると、周りは大自然だった。そう、今朝見たあの光景と全く同じの。

「……なんなんだよ……ってあれ？」

俺は周りを見た。今朝と同じ大自然の中ではなかったようだ。周りには3人、いた。

「誰だ？こいつら。」

まだ眠っている3人をじっと見つめていると……パチっと1人の目があいた。

「ふああ……よく寝たああああああってどこどこだ!？」

「うわ!びっくりしたあ!」

起きてきたのは女だと思われる眼鏡をかけた、俺と年代ぐらいの子。

そしてこの大声の会話で他の2人も起きてきた。

「なんか騒がしいな……」

「良く寝た。ん?……ん?……誰?そしてここはどこ?」

ここで4人の容姿について

大樹

髪型・・・なんていうんだ、ショートの中の1よりちょっと長いぐらい。

見た目・・・普通

？

髪型・・・ストレートセミロング（なんだこの名前）
見た目・・・赤いふちの眼鏡

？

髪型・・・ショート
見た目・・・男か女かわかんない

？

髪型・・・ショート、そして少しぼさぼさ
見た目・・・赤い濃い暑いふちの眼鏡

「で、こいつはどいつ？」

「知らん。俺が知りたい。」

「んーボゴヨホン（一応咳払い）、まず自己紹介を！」

「つつーことでお前から。」

「俺からか!」

見事に指名されました田賀大樹。

「え・・・と田賀大樹です。今、持っているものは・・・あるかな・・・あ! あった。リコーダーです。」

「じゃ、次ウチ! 島崎輪羽子です! 持っているものはパーカーだけです!」

「じゃ、俺か。濱愁斗です。もっているものは・・・パーカだけです」

「えっとじゃあ、最後か・・・浅井遼季です。持っているものは・・・はちまきだけです。」

とりあえず、自己紹介は終わった。うん。さてこれからどうするか。とりあえず和解だ和解。

「は、遼季君は・・・何が好き?」

うっわあ、ベタな質問だなあ。自分で質問しといてつくづく思う。さあ、答えてくれるか、何が好きなのかな遼季君は?

「.....」

あ、あれ? やっぱりベタすぎたか・・・どうしよう・・・

「・・・男」

「は?!男!?!」

「違うわ!私は君づけされる人じゃないよ?」

「へ?・・・私?」

「そう。私は、女。立派な。」

やばいぞ。俺は大変な間違いをしてしまったぞ。

間違えないでください。女です。(後書き)

変なところできました。私です。

遼季はおんな。正真正銘女。いや、服を男子ととっかえしたら思いつきり男に見えるけどね。

思いっきり飛ばそうか

俺は大樹。なんかいろいろあってここまで来たけど説明がメンドイからいいや。

作者「へへッ」

大「……えーと。遼季さん？」

遼「何。」

大「なんか、すみません!!」

遼「……」

えー前回おれはこの浅井遼季という女の子の事を男の子と間違えたわけで……。

大「別にその、悪気があったわけじゃないんだけどね?」

遼「そんなくらい分かる」

輸「……まあまあ、大樹もアサちゃんも、仲良くしようよ」

ちよつと沈黙

大「た、大樹?!いきなり名前呼び?!」

遼「あ、アサちゃん?!」

輸「え、いやだって名前の方が呼びやすいし、アサイだからアサちゃん……」

遼「……大樹。」

大「はいい！」

遼「許す。」

大「へ？」

遼「私の外見が男にみえたんでしょ？よく言われたよ。……よく言われ……た……」

大・輸・愁「？」

一瞬、遼季の様子がおかしくなった。やっぱりそんなに精神に來たのか。

愁「どうした？」

遼「言われたよ。言われてたけど……」

愁「けど？」

遼「どこで、言われてたんだろう。誰に言われてたんだろう。」

愁「え？」

遼「何かが思い出せない。私たちはこの世界に来るまでどこで何を
していて暮らしていたのか全く思い出せない。私たち・・・何をし
ていたんだろう。」

確かに、俺も何も思い出せなかった。俺は気付いたらこの世界にい
たんだ。でも、その前に俺は誰かという笑っていたような・・・？
そして、こいつらと初めてあった気がしないような・・・？

俺が質問しようとして口を開いたとき、他の3人も口を開いた。

「「「「なあ（ねえ）どうかであったことあるっけ？」「」「」

思いつきり飛ばそうか（後書き）

うん、なんか意味不明でゴメン。

もう一回詳しく自己紹介させるね。

田賀大樹

「え・・・と年齢は12歳。所持品はリ、リコーダー?!・・・です。あだ名は田賀ちゃん、田賀、大樹・・・ぐらいかな?」

浅井遼季

「なんでリコーダーでびっくりしてるんだ。

年は11歳。一応小6。一応女。所持品はハチマキ。あだ名はアサちゃん、浅井、遼季。」

島崎輸羽子

「ふうう！ウチの番きたあ！年齢12歳、所持品パーカー&眼鏡！あだ名はユウちゃん、シマちゃん、輸羽子、です!」

濱愁斗

「なんか最後になった！年は12歳、所持品パーカー&眼鏡ってお前と一緒にじゃねえか「悪かったか」いえ。あだ名は濱、愁斗、ぐらいかな・・・」

つてことでまた次回！

と、いじつとで「page恒例の敵です

大「なあ、こついつのつて切り出し難しいよな。」

愁「何で作者は自分の本音を俺たちに言わせているんだ。自分で言え自分で。」

作「グサリ」

輸「という、こついつ切り出しで始まる本編です。」

で、今回も説明を飛ばさ……愁・輸・大・遼「それはやめろ」
自己紹介が終わり遼季の発言によって見事に八モツた俺たちは、な
んか変な雰囲気だった。

輸「やっぱり、どこかで……」

大「あつたことあるんだね……」

なんとか思い出そうと話していたその時だった

『ハツケンハツケン、ヤッタネヤッタネ』

愁「ん？」

その機械音のような声の主は中に浮かんでいた。
ここで、その主の容姿についてちよつと話そう

球体のような形で真っ黒。周りがモヤモヤしていてモヤモヤしていた。そして髪にハイライトが入ったような感じの裂けた口がある。口の中の色は若干灰色だ。

遼「これってさぁ……いわゆる私たちの……敵？」

輸「みたいだね。」

愁「にしたってこの無防備の俺たちはどうやって戦えというんだ？」

そういう問題を抱えながらもなんとなく殺されそうな空気が漂っている。

俺は知らず知らずのうちにリコーダーを口にくわえていた。

そして、思いっきりふいた。

「ピ」

「……………」

愁「……………!! @ x x / ? ? ! ! , , v m s j n f d / / / , /

遼「うるっせえ!!」

輸「ギャッ……」

3人が混乱している中俺は何をしているのかというと・・・誇らしげな顔をしていた。

ちなみに敵は何の効果もなかったようで俺たちに攻撃をしかけようとしていた。

遼「今の効果なしじゃねえかよ！　たくこんなうるさくなって・・・耳がおかしくなるな。」

愁「危害が加わったのは俺達だけか！」

輸「なんかやばいやばい！！！」

そう、敵の灰色の口の奥には赤い光がみえた。攻撃しようとしている。やばいぞやばいぞ。

『サン、ニイ、イチ』

遼「チッ」

『ハツシャ』

敵からは赤い光線が発射された。レーザーのようなナイフのような。しかし、その光線は俺たちにはあたらなかった。なぜなら遼季が敵を思いつき蹴ったのだ。

ガスッ！

『イタイツッ!』

遼「お!手ごたえあり!」

蹴ったから光線は遼季の足に当たって消えた。そして敵も消えた。

輸「アサちゃん・・・なんかケチャップが足から出てるけど。」

遼「ウソ!やった!私体からケチャップが出せるんだ!これでもう味付けに困るママのお悩みは解決だね!」

遼「・・・っていうのは嘘で。あーあ、こんなになるんだ・・・あの攻撃。でもさ・・・」

愁「でも?」

遼「痛くないんだよね。全然。」

大「なんで?!」

ピロリロリーン ピロリロリーン

どこかから音がした。目の前が黄金の光になって妖精みたいな羽をはやしたやつがでてきた。

『さあ、そのバーコードにスマホをかざしなさい。』

大「?!」

ああ、そういうば持ってたんだっけ。俺たちはかざした。スマホを
すると景色は元の世界に戻っていた。

大「なんだったんだ？」

遼「あれ！傷が治ってる！しかも、スマホの画面になんか写ってる
！」

輸「ホントだ！なにになに・・・へえゝさっきの敵ナツケルっていう
んだって。倒し方は、さまざま・・・ってさまざまってなんだ！」

愁「さっきの光線って攻撃した後だと痛くないんだってさ。」

遼「へえゝ・・・っていうかさ、なんでスマホ持ってるんだっけ？
私たち。」

大「え？だから先生に配られて・・・！！！！！！！！！」

遼「先生？」

大「俺、思い出した！」

と、いろいろで「prog恒例の敵です（後書き）」

やっと本格的に入ってきた。

っていつか大樹思い出すの早すぎ。もつちちょっと後にしてくれればよかったのに。

大樹の記憶（前書き）

今回マジで短い。

大樹の記憶

大「思い出した・・・俺は田沼小学校の生徒で6年生で・・・先生に携帯を配られて、電源を押したらここに！」

そしておれはこの4人との関係も思い出してしまったのだ。

大「お前らは・・・俺と同じクラスだった。」

輸「・・・あ・・・ああああああ！お前、田賀大樹だ！！無神経二人組の一人！」

この『無神経二人組』で他の二人も思い出したようだった。

愁「おお！田賀ちゃんか！田賀ちゃんだ！」

遼「・・・そういえば席となりだったような気が・・・」

大「何で無神経二人組で思い出してんだ！！」

愁「どうりで見たことあったわけだ！」

輸「あれ？でもさあー」

遼「でも？」

輸「無神経二人組のもう一人、誰だっけ？っていうか、私この私含めて4人以外のクラスの人が思い出せない！！」

愁「まっさかあ。．．．んなわけないと思ったけどある!」

遼「うわ、私もだ!」

大「．．．全部思い出せると思ったんだけどなあ．．．ま、少しずつ思い出すか。」

危険ってどういつときに迫ってくると思う?」

まさに今、この時だった。

最初にきづいたのは輪羽子。目を見開いて俺の向こう側を見ていた。俺は振りかえると、声も出なかった。俺に気付いて遼季、愁斗と振りかえった。

後ろからは、無数のナツケルが俺達を狙っていた。

無数のナツケル

遼「チツ。しぶといな。」

『コイツラ、コイツラ、コイツラ、コイツラコイツラコイツラコイツラコイツラ……』

『ハヤクヤツテハヤクハヤク』

『ワカッテル。ヤルカラダマツテテ』

いろんなナツケルの声が聞こえてくる。

え？何？カタコト読みづらいだと？知らんよおそんなの。作者がや
ってるんだから。

『カタコトデワルカッタナ！』

ナツケルも参戦した！分かったよ……

『カタコトで悪かったな！へっ。漢字なんでもともとなか
つたんだよ！』

大「なんか口数増えてるうう！」

遼「ターイキくん。分かってるかな？今の状況。」

大「ええ、十分。」

『(そうだった・・・俺達攻撃するところだった!)三、二、一』

輸「忘れてたんかい!」

『うるっせえ!発射!』

そのビームはなんと俺一人に向かっていった。ナツケル全員分が。

大「死ぬ!」

愁「あきらめが早いよ?田賀ちゃん。」

愁斗の手にはどこから出したのか拳銃が握られていた。そして、引き金を引いた。

パン、パン、パン

『クッ・・・』

愁「やった!」

ナツケルは三分の一ぐらい減った。

遼「次は私の番で。」

遼季の手にもどこから出したのか日本刀が握られていた。

遼「おりゃあああああああ！！」

さらに三分の一減った。

輸「んじゃ、最後はウチで。」

輸羽子の手にもどこから出したのかパチンコが握られていた。

バチッ バチッ バチッ

ナツケルが全員消えた。

大「死ぬところだったけど・・・ありがとう。っていつかお前らそれどこから出したんだ？」

愁・輸・遼「いや、何か手に握ってあったから。」

大「それでよくあそこまで見事に倒せるな・・・。」

愁・輸・遼「本能的に」

ああ、こいつらに手を出したら殺されるなと思った大樹だった。

無数のナツケル（後書き）

bgm

CRAWL

三人のおじさん

この曲に支えられて書いた。

ぜひ聞いてみて！

CRAWLはカッコいい曲だけど、三人のおじさんはギャグ曲だよ
！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2213x/>

1日だけのRPG

2011年11月15日21時32分発行